

帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.29

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

- 特集1 新潟町地区の変化とまちづくり P.2~3
- 特集2 新潟の漆器 P.4
- 常設展示室から 白山神社大船絵馬(複製) P.5
- おすすめの冊子 新潟の町 新かわらばん P.5
- みなとびあ 天保六年新潟唐物抜け荷事件と十日町加賀屋 研究notes P.6
- 館長日記 昔の物価 P.7
- 収蔵資料紹介 新潟市大火災後渡船場の繁華と焼残の万代橋を見る P.7
- 博物館を支えるモノ・もの マスキングテープ P.8



ファンクラブ(ツアラー)2013
「頸城の古墳めぐり」水科古墳群

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.29

■ 帆檣成林「はんしょうせいりん」第29号
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■ 印刷／株式会社博進堂

【たいけんのひろばプログラム】楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・参加費・対象
7月20日(土)・21日(日) 14:00~15:00	拓本をとってみよう	むかしのお金の拓本をとります。	不要・無料 材料がなくなり次第終了
7月27日(土) 14:00~15:30	みなとびあ もめん部	糸紡ぎや機織りなど、博物館資料を使い昔の手仕事を再現する試みです。	お問い合わせください。
7月31日(水) 14:00~15:30	紙をつくろう、飾ろう	ワラを使って、紙の作り方をたいけんしたり、染め紙や墨流し、箔加工など、紙を飾る方法をたいけんします。	7月23日(火) 締切・無料 小学1~3年生10人
8月1日(木)・2日(金) 14:00~15:30	鏡をつくってみよう	古代の鏡作りになぞらえて、オリジナルの鏡を鑄造して磨きます。	7月26日(金) 締切・300円 2日間参加できる小学4~6年生10人
8月3日(土) 13:00~15:00 8月10日(土) 10:00~16:00	塩をつくってみよう	古代の新潟で行われていた、土器を使っての海水から作る塩づくりに挑戦します。全2回で1回目は、塩づくりのための土器を作ります。2回目は海岸で海水から塩を作ります。	7月30日(火) 締切・200円 全2回参加できる小学生以上10人
8月4日(日) 14:00~15:30	ポンポン船をつくろう	ろうそくの火で空気をあたためて進む力にする、ポンポン船をつくります。	7月30日(火) 締切・200円 小学生以上15人
8月11日(日)・18日(日) 10:30~12:00 14:00~15:30 (両日とも2回開催)	「新潟の漆器」展関連プログラム 漆器の技法にちょうせん ～沈金～	彫刻刀で板に模様を彫り、彫ったところに漆をすって、金粉をまきつける「沈金」という技法を体験し、本漆のコースターを作ります。	不要(当日会場へ)・500円・小学生以上 材料がなくなり次第終了
8月7日(水)・21日(水) 13:00~16:00	高機で裂き織りをしよう	高機(たかはた)とよばれる、はたおり機をつかって、裂き織りのコースターをつくります。	7日分は1日(水)、21日分は15日(水) 締切 200円・小学3年生以上各日6人まで
8月24日(土)・25日(日) 14:00~15:00	菓子型で飾りをつくろう	菓子職人が使っていた菓子型を使って、かわいい紙粘土のマグネットをつくります。	不要(当日会場へ)・無料・小学生以上 材料がなくなり次第終了

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

現在開催中 企画展 新潟の漆器

県内遺跡から発掘された漆器関係資料や、近世末から近代にかけて使われた市内外の漆器の展示を通じて、漆器がどのように使われてきたのか考えます。また、漆器職人の道具や新潟の漆器の製作技法など、新潟における漆器生産についても紹介します。

【会期】2013年7月20日(土)~9月1日(日)
【休館日】7/22(月)・29日(月) 8/5(月)・19(月)・26(月) ※8/12(月)は開館

一般	600円(480円)	()は団体料金(20人以上)
高校生・大学生	400円(320円)	※小・中学生は土日祝日無料
小学生・中学生	200円(160円)	※企画展示観覧券で常設展示も御覧いただけます。

関連イベント

◆講演会 ※新潟市歴史博物館・新潟市文化財センター共催
テーマ：「知られざる漆の文化史9000年の歩み—その歴史と未来—」
講師：四柳 嘉章氏(石川県輪島漆芸美術館長・漆器文化財科学研究所長)
日時：2013年8月4日(日) 14時~15時30分
会場：新潟市歴史博物館 2階セミナー室
定員：90人(7月26日申し込み締切)、資料代100円

◆たいけんプログラム「漆器の加飾を体験—沈金にチャレンジ」
講師：新潟市漆器同業組合
内容：漆器の加飾を体験する
日時：2013年8月11日(日)・18日(日)
各日共10時30分~12時・14時~15時30分
定員：小学生以上、事前申込不要、各回共材料がなくなり次第終了、材料費500円

博物館を支えるモノ・もの マスキングテープ

マスキングテープあるいは養生テープとよばれるものです。ある材料を部分的に覆い隠す「仮どめテープ」で、ペンキや絵具の塗装でよく使われます。粘着力が弱めなので、材質を傷めることなく簡単に剥がすことができます。メモや写真を手軽に貼ることもできるため、最近はカラフルな商品が人気を集めているようです。

博物館では、資料を梱包する場面で活躍します。また剥がすことを前提に、「ほどほど」の力かげんで材を接着できるからです。頑丈に着けてしまうと、次にそれを開く時に損壊のリスクを残すことになります。包んだものは、いつか誰かが開くもの——。大きさにいえば、資料を未来にひきわたす月下氷人といえましょうか。

次回企画展 第10回むかしのくらし展 「移り変わる暮らしと住まいの道具」

暮らしの舞台である住まいとその道具の展示を通して、道具と生活様式の変化をたどり、それぞれの特色を紹介します。

【会期】2013年9月14日(土)~11月24日(日)
【休館日】9/17(火)・24(火)・30(月) 10/7(月)・15(火)・21(月)・28(月) 11/5(火)・11(月)・18(月)

【観覧料】無料 ※常設展の観覧は有料です。

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

時間：13:30~15:00
会場：本館2階セミナー室
申込：不要。当日受付、定員50人程度
資料代：100円(資料のない回は無料)

- 7月の講座：7月28日(日) 「シリーズ新潟の美術《趣味》」 講師：木村 一貫
- 8月の講座：8月25日(日) 「近代新潟の女性の衣服の変容と女子教育」 講師：藍野 かおり
- 9月の講座：9月22日(日) 「湊町新潟Ⅰ」 講師：安宅 俊介
- 10月の講座：10月27日(日) 「堀直寄の印判について」 講師：田嶋 悠佑

編集後記

「帆檣成林」第29号はいかがでしたか。特集2で取り上げましたように、7月20日(土)から「新潟の漆器」展が始まりました。古代から人々に使用されてきた漆器の魅力を感じていただければと思います。さて、7月も半ばを過ぎて蒸し暑い季節となって参りました。当館では上記企画展のほか、たいけんプログラムも夏休み特別編成でおこなっております。涼みがてら、みなとびあへぜひお越しください。みなさまのご来館をお待ちしております。(早川)

お問い合わせ・申込みは博物館まで・・・

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
TEL:025-225-6111 fax:025-225-6130
E-MAIL:museum@nchm.jp
休館日：毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間：9:30~18:00

新潟町地区の変化とまちづくり

小林 隆幸

信濃川河口部左岸に位置する新潟市の中心市街地は、江戸時代の新潟町に重なります。時代とともに街も大きく様変わりし、今では「中心市街地活性化」や「まちなか再生」などと銘打ったまちづくりが試みられています。では、現在の中心市街地である新潟町地区（便宜的に呼称）ではどのようなまちづくりが行われてきたのか、その歴史を振り返ってみます。

堀と通りのまちづくり

今でもこの地域には信濃川に並行して「通り」が、それに直行して「小路」がめぐっています。こうした現在の街の原型は明暦元（一六五五）年の新潟町の移転に遡ります。新潟町は中世末から近世初頭にかけて何度か移転しており、明暦元年の移転とは元和三（一六一七）年につくられた新潟町からの移転を意味します。信濃川の流れが変化したため町は川岸から遠のき、港が機能しなくなっただけで場所を変えて再構築されたのです。

明暦元年の町割りの基本は、元和三年の町を引き継いでいますが、新たに南北に片原川（現東堀）・寺町川（現西堀）、東西に白山堀（後の一番堀）・新津屋小路堀（後の二番堀）・広小路堀（後の四番堀）・御祭堀（後の五番堀）が掘

られ、交通の動脈が確保されました。通りと小路が整備され、通りに面して店が立ち並び、現在にいたる街の基礎ができました。

南北の堀と通りは信濃川の流れに沿った地形に合わせて弓なりに整備され、それに直行するように東西の堀と小路が整備されています。つまり信濃川を軸に、そこから堀伝いに小船で荷物を輸送することに適した構造になっているのです。新潟の町は、船の往來を基盤に港の機能を優先して設計されてきたことがわかります。

そのため、港を活かした活動の中心は大川前など信濃川に近い地区に置かれ、生活する町人の精神的な活動を担う寺町が、信濃川から離れた町の奥手となる西堀に沿ってつくられました。信濃川から西の砂丘側へ、また生業活動の場から生活、精神活動の場へと、その機能が変化していきました。

こうして港に適したまちづくりが行われた新潟町は、江戸時代から明治にかけて、北前船とも呼ばれた廻船の一大寄港地として発展していきました。

自然環境から町を守る

日本を代表する二つの大河の河口につくられた新潟町は、港としての立地には申し分ありませんでした。しかし、

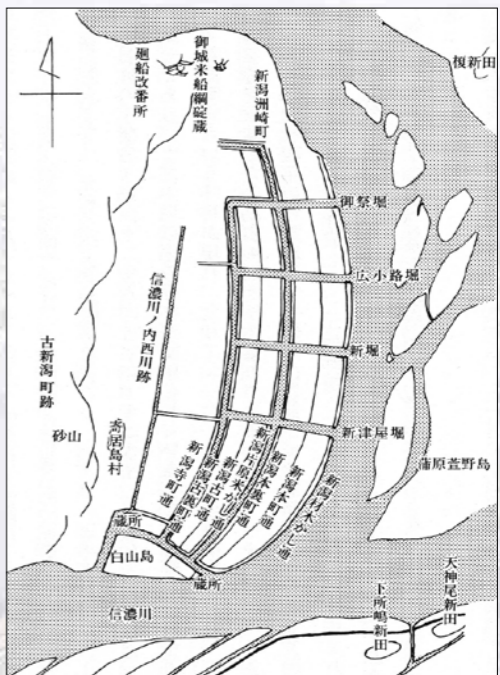
自然の特性と向き合いつながりながら町を維持することも必要でした。

その一つは海岸砂丘からやってくる飛砂です。強風の日は町まで砂が吹き寄せ、冬の強風では砂嵐となります。現在でも冬の季節風によって海岸を通る道路が砂で埋め尽くされるほどです。そのため砂丘に林をつくる

砂防林の造成は江戸時代からすでに行われていました。初代新潟奉行であった川村修就の松の植林はよく知られています。林をつくって砂の害から町を守ることは、新潟町に暮らす人々にとって深刻な課題でした。

また地盤沈下も町の人々を悩ませました。昭和三十年代の天然ガスの採取がひきがねになって地盤沈下は加速しますが、地中深く砂の層が続く平野部一帯は常に沈降していました。

近年、発掘調査によって江戸時代の新潟町の跡が確認されるようになりました。特に広小路地点では、屋敷の基礎や溝などの遺構のほか、当時の人々が使っていた生活用具が多数見つかりました。市街化によって破壊された



江戸時代前期の新潟町
〔新潟市史〕通史編1所収：元禄11(1698)年「蒲原新潟立会小絵図」から作成

近代化へのまちづくり

明暦の移転後も信濃川が運ぶ土砂の堆積によって川側へ土地が広がり、港となる川岸は町から離れていきました。新潟町と信濃川は畔下川などの水路で結ばれるようになりました。こうした地形上の変化はあっても、江戸時代を通じて町並みや港としての機能が大きく変化することはなかったと思われま

す。町並みの変化は、開港場となり県庁所在地となった明治初期に現れます。明治五（一八七二）年に新潟県令となった楠本正隆は町並みの拡大や改造に取りかかりました。礎町通や下大川前通などの新たな町割りをするともに、道路の改修や通りに面した建物の庇をそろえたりしました。また、白山神社の境内に白山公園となる新潟遊園も整備しました。

その後も役所や学校などが洋風建築でつくられ、近代的な景観へと変化していきました。

また、明治期、新潟町は度々大火に見舞われました。町の多くを焼き尽くした明治四十一年の二度にわたる大火は、耐火・防火のまちづくりを本格化させ、町の機能性も高めさせました。道路の幅が拡張されたり、行き止まりの道が延長されたりしました。現在のNEX T21と新潟三越の間で行き止まりになっていた榎谷小路もこの時に延長され、東中通側へ通じるようになりまし

た。さらに、妻入りで庇が出た建物は延焼しにくい横屋根となり、木羽

町の機能の変化

江戸時代の新潟町は長岡藩の港としての役割を担っていました。城のある長岡が政治の中心で、港のある新潟が商業や流通の中心になっていました。こうした機能が幕末から明治にかけて変化していきました。

長岡藩領であった新潟町は幕末に天領となり、町の中核部には奉行所が置かれました。そして、幕領であり日本海有数の港であった新潟は日本海側唯一の開港場となり、さらに県庁所在地になりました。明治以降、新潟町は商業ばかりでなく、新潟県の政治の中心としての役割も担うようになりまし

た。はじめ新潟県庁は、奉行所建物を引き継いでいました。この場所が現在のNEX T21と新潟三越にまたがる位置です。明治十三年の大火で旧奉行所の建物が焼失した後に、県庁は東中通の新庁舎へ移りますが、旧奉行所の跡地には、明治二十二年から市役所になる新潟区役所が警察署と並んで新築されます。県政から市政へと変化しても、この地区には行政の中心機能が引き継がれます。その後、大火で焼失するこ

とはあっても、この場所に初代から四代目までの市役所が置かれました。その後県庁は東中通から学校町通へ

移り、現在は新潟町地区を離れ、新光町に移転しています。市役所は県庁跡地の学校町通へ移っており、行政の中心は都心部を離れていきました。新潟町地区の機能が大きく変わる中で、その後のまちづくりに大きな影響を与えたのは築港です。開港後も大型船が入港できない信濃川左岸の新潟港に代わって、埠頭を持ち大型船が着岸できる近代的な港灣を建設することは新潟市民にとって悲願でした。大正三（一九一四）年には沼垂町と合併し、新潟市は信濃川右岸にも広がります。そして新潟市域となり鉄道の駅を備えていた沼垂側に新たな新潟港が着工され、大正十五年に完成します。ここに開町以来、港として整備され機能してきた新潟町地区は、図らずもその性格や目的を大きく変えることになりました。

都市化と街の変化

戦後、車社会の到来と都市化によって、昭和三十年代に堀は埋められ、道路へと姿を変えました。また、オフィスビルや住宅などが現代的な建物に変わっていきました。

堀の埋め立ては、港と船の時代の終焉を決定的にしました。近年、新潟情緒の復興とともに堀の復活が叫ばれていますが、復活したとしても船の往來をなくした堀は残念ながら本来の目的を失っています。都市化は新潟町地区の周辺にもおよ

思われていた江戸時代の町跡が良好な状態で残っていたのです。しかも明暦の移転当時のものと思われる跡は、現地表よりも二メートル以上も深い場所で見つかりました。海や川の標高と比較しても、人々が生活できる位置ではありません。沈降によって当時の地面が埋没したと考えられます。その位置から現地地表数十センチ程のところまで江戸時代の町の層が続いており、沈降してはかさ上げして整地する作業を何回も繰り返してきたことが読み取れます。こうして沈下へ対応しながら町を維持してきたことが発掘調査からうかがうことができました。

びました。新潟駅に近い万代には新潟交通のバスステーションができ、昭和四十八年には「万代シティ」として大型スーパーやレインボータワーなどが開業しました。その後も新たな店舗や娯楽施設ができ、広い地域から人が集まる賑わい空間になっていきました。こうして新潟町地区の都市の中心性は次第に薄れていきます。さらに追い打ちをかけるように住宅地が郊外へ広がり、そこへ大型ショッピングセンターができ、人々の動きも中心市街地から郊外へと移っていきました。

まちなか再生

近年、都市の魅力を取り戻すことを目的に、住民を交えたソフト・ハード両面によるまちづくりが行われています。新潟市でも「新潟市まちなか再生本部」による報告書が平成二十四年三月に策定され、中心市街地の活性化に向けた提案がまとめられています。

平成二十二年の中間報告では、建築家・隈研吾氏のアドバイスとして「まちには長く人が住んで染みついていいる」と紹介されています。新潟町地区には越後の中核として多くの人口を抱え、四〇〇年にわたる人々の暮らしがあります。それが文化財として、伝統として、今も息づいています。今後こうした資源を大切にしたいまちづくりが期待されます。

（こばやし たかゆき 学芸員）

この夏、「新潟の漆器」展と題して、くらしの道具としての漆器を展示します。展示の中心となるのは漆器のお椀やお膳です。

冠婚葬祭などの行事や改まった食事の席では黒や赤の漆器が登場し、身近なところでも漆器はよく目にされます。また、一〇〇円ショップの食器コーナーにも、黒色や赤色に塗られたお椀やお盆が並んでいますし、レストランや食堂で和食を注文すると、漆器のお盆や汁椀、飯椀でふるまわれる場合が多いと思います。

しかし現在目にする漆器風の食膳具の多くは、合成樹脂の素体に合成塗料を塗布した合成漆器で、天然の漆と木を用いた手作りの漆器ではありません。ただ、合成漆器が広く使われていることは、かつて祭儀に使われ、あるいは一部の貴族の道具であった漆器が、くらしの道具として普及したことを物語っています。展示では、日用品の漆器として中世から用いられた柿渋を下地に用いた漆器をはじめ、古代から近世までの発掘された漆器や、江戸時代末から昭和に使われた漆器を展示し、どのような漆器が使われてきたのかを振り返ります。

の飲食器を中心に漆器の生産が盛んになりました。元治元（一八六四）年には塗り専門の職人である塗師屋の数は九十軒に上りました。技法の特色には黒や朱一色の塗りを施す花塗と、漆で多様な模様を作り出す変わり塗りがありました。

展覧会では、現代の塗師による、新潟の漆器の三種の塗りの工程を写真パネルで紹介いたします。

まず竹塗は、お膳や重箱、菓子器など様々な道具に使われた塗りです。竹塗といっても、実際の材料には竹を使わずに、竹のような風合を漆の塗りだけで表現する技法です。砥の粉と漆を練ったサビを塗りつけて竹特有の節をつくり、漆が程よく乾くのを見計らってマコモを蒔いて研ぎ、竹の風合をつくり出します。

錦塗は、変わり塗りの一つで、戦後は座卓などにも使われました。錦塗は、いくつもの色の漆を塗り重ねて漆の層を作り、研ぎ出して複雑な多色の模様を浮かび上がらせる技法です。黒漆を不規則に叩き塗って「目を立て」、盛り上げた黒漆の上に、黄・緑・朱色の漆を薄く塗り渡します。錫粉を蒔いて、再度黒漆を塗った上で、研ぎと漆塗りを繰り返すことで、多色の漆層を平らな模様としてつくり出します。

竹塗と錦塗は、いずれも研ぎ出し技法を用いたもので、これを専ら行う塗師を磨き師と呼びました。磨き師は、漆の塗り、乾燥、研ぎを重ね、塗りの厚味や乾き具合、砥ぎの具合を加減しながら、模様とツヤが最も見事になるように計算して作業します。これは時間がかかる仕事で、たとえば下地と中塗りに五回、彩漆の重ね塗りに五回、模様を研ぎ出すのに三回、最後にツヤを出す作業に六回漆を塗ると、漆を乾燥させるだけで一ヶ月以上かかります。このため、できるだけ複数の仕事を同一の工程になるように組み合わせ、効率的に仕事を進めます。

新潟の漆器において磨き師と並ぶ存在が花塗師です。花塗は塗りっぱなしとも呼ばれ、刷毛で塗りあげたそのまま仕上げになるため、集中力と高い技術が求められます。花塗には、発色とキメを高め、なおかつ縮みが出ないように漆の乾き加減を適切に調整する技量も重要になります。

塗師の漆器制作の技法と、その技法を用いて作られた新潟の漆器を、展覧会会場では是非ご覧ください。

（もり ゆきひと 学芸員）



花塗の作業



錦塗の作業



竹塗の箸

常設展示室から

白山神社大船絵馬（複製）

展示資料の中で最大のものは、この白山神社大船絵馬（複製）です。縦154cm、横324cmの画面は鮮やかな色彩で描かれ、展示室の中でもひととき目立つ存在です。

白山神社大船絵馬は、嘉永5(1852)年、水原の市島次郎吉が絵師井上文昌に描かせ、白山神社に奉納したものです。市島次郎吉が新潟湊からの御城米(幕府領の年貢米)の回漕を請け負っていたため、その無事を祈願し感謝するためのものだったと考えられています。この絵馬を白山神社に奉納するにあたり、市島は絵馬を車に載せ、盛装した数十人の芸妓に引かせて新潟町を練り歩き、白山神社まで運んだとされます。なんとも華やかな話です。

展示資料は新潟白山神社の拝殿に掲げられている実物を基に、これが製作された嘉永5年当時の色彩の再現を試みた復元複製です。この複製にあたっては実物の詳細な調査を行い、顔料や支持材の分析とあわせて、画題についても子細に確認しました。

金雲によって上下に分割された画面の下側は新潟湊から御城米を運び出す様子です。画面右下には白山神社、境内にあった町蔵が描かれています。舩は河口と沖とを行き来し、沖に停泊しているベザイ船に米俵を積み込んでいる様子が描かれています。

画面上の右側は、朝日が昇る江戸城と江戸城下、江戸湊の入口に位置していた佃島が描かれています。また、江戸湊の沖ではベサイ船が停泊し、舩に米俵を積み下ろしている様子が描かれています。



画面上の左側は大坂で、左上には大坂城とその城下、ベザイ船が停泊している大坂湊に、小高い丘の天保山が描かれています。

船に注目してみると、差配人請、村請、町請などの記載のある旗が立てられています。大船絵馬には、岩船の船が六艘、北蒲原の船が二艘、刈羽の船が五艘、頸城の船が三艘描かれています。これは、差配人である市島が持つ船のほかに、村、町が輸送を引き受けて使用した船があったことを物語っています。その理由は、廻米輸送量の増大に対応するためであったと考えられています。

大船絵馬は新潟湊の繁栄の様子を垣間見せてくれるだけでなく、その背景に廻米輸送のシステムがあったことをも示しています。

越後廻米輸送については、当館研究紀要第2号研究ノートにて「越後廻米輸送における地元請負の展開」として報告がありますのでご参照ください。

藍野 かおり(あいの かおり 学芸員)

おすすめの1冊

新潟の町 新かわらばん

本書は、町の移り変わりや風俗を見つめてきた著者が、新潟島で繰り広げられた歴史や事跡について、往時の写真を織り混ぜながら書き綴った一冊です。

著者の笹川勇吉氏は、明治四十三(一九一〇)年新潟市に生まれ、笹川餅屋の三代目として家業を担いながら、新潟郷土史研究会、新潟県民俗学会などに所属し、郷土史家としての顔も持ち合わせた人物です。本書は笹川氏が新潟日報発行の「かわらばん」に連載した記事を一冊の本にまとめたもので、著者自身のエピソードをからめつつ、町に点在する歴史の足跡を紹介しています。古写真がふんだんに掲載されていて、往時を知らない私にも当時の暮らしや文化が想像できます。

このほか、事跡を伝える石碑の写真も多く掲載されています。文や写真をたどりつつ、昔日に思いを馳せながら町を歩いてみると、見慣れた風景が違って見えてくるでしょう。

(渡邊 久美子 学芸員)



笹川勇吉著
1995年4月初版
考古堂書店

天保六年新潟唐物抜け荷事件と十日町加賀屋

安宅 俊介

【新潟唐物抜け荷事件】

天保六(一八三五)年十月十九日、村松浜にて一艘の薩摩船が遭難しました。船には抜け荷(密輸品)である唐物の薬種や織物、鼈甲類等が積み込まれていました。遭難の現場では、連絡をうけて、すぐに駆けつけた新潟町の商人らによって密輸品の隠匿がはかられました。しかし事件は翌天保七(一八三六)年に露顕し、新潟町の商人をはじめ、多数の関係者が処罰されることになりました。

【加賀屋と美濃屋】

十日町加賀屋は縮問屋としてとくに知られていますが、明和・安永年間から薬店を別に出して経営をおこなない、薬種や取り次ぎ薬・自家製薬のほか、絵具・筆・墨・紙・化粧品・三味線・香など、幅広く商品を取り扱っていました。店であつかうこれらの商品は、江戸や京都をはじめ、全国各地から取り揃えたものでした。

こうした取引先のなかに、抜け荷事件の際に捕らえられた新潟町の商人美濃屋長之助もいました。この当時、新潟湊には唐物抜け荷である大黄や甘草といった薬種を大量に積み込んだ薩摩船が入港していました。このため薩摩船の入船があるときは、唐物薬種を比較的に安価に仕入れることが出来たといえます。加賀屋の資料中には、美濃屋とのあいだで、薬種や砂糖等の大口の取引があつたことを示す代金請求書や、薩摩船入港の際に予想される薬種等の相場の

しらせが残されています。また美濃屋は、天保六年の薩摩船遭難当時の状況についても、その概略を加賀屋へしらせています。さらに、その書状には来年二月には新たな薩摩船の入津があるだろうという旨も記されていました。

【美濃屋からの書状】

天保六年の遭難の後も、両者のあいだでは、密に連絡がとられていました。翌天保七(一八三七)年六月十二日、加賀屋の蕪木の元に到着した美濃屋からの書状(同月三日付)があります。それには、おおよそ次のようなことが書かれています。

(略)……春中は「船」(薩摩船のこと)を「今や今や」と待っていました。五月二十日に紀州船ばかりが入船してきたことがありました。この船は大坂下りとのこと。荷物は、晒蠟、生蠟、白砂糖、鯉節ばかりでしたが、はなはだ不審に思い、聞き合わせた所、実は薩州船ということでした。この春、公儀より支配代官へ御書付をもって仰せ渡されたことよって、(抜け荷の)取り調べが嚴重になったため「極内分」に名前をかえて出帆してきました。鼈甲類が、一箱、ほかに大黃、甘草が少々あり、高値ではございましたが、引き続きやってくる船も無い様子ですので、右の大黃五十斤、甘草五十斤をあわせて一箱にしてお送りしたいと思ひます。……(略)

この書状到来の後、天保七年六月二十二日に新たな書状(同月十一日付)が加賀屋の蕪木の元に届きました。そのなかで美濃屋は、さきの大黄や甘草について、先方がこの二つの品は「双方組」でなければ商いすることが出来ないとしたため、両方うけとって、加賀屋へ送るという旨が記されています。しかしこれらの商品が、ついに加賀屋の元へ届くことはありませんでした。

【美濃屋の捕縛】

さきの手紙から二ヶ月が経った頃、今度は長岡の間屋の品田松左衛門から加賀屋の蕪木の元へ一通の書状(八月二十六日付)が届きます。

(略)……このたび唐物薬種を取り扱っている者がいるということ、江戸から勘定奉行様が新潟へ出張なされ、吟味の八人の者が召し捕らえられました。この八人のなかに美濃屋長之助の名前がありました。聞く所によれば、長之助の帳面がお取り上げになったそうす。このため、その先々までもお糺しになるかもしれないという噂があります。……(略)

美濃屋の捕縛と、それによって美濃屋の帳面が取り上げられたという風聞から、累が加賀屋まで及ぶかもしれないことを見越した報知です。当時の商人のもつ情報網の広さがうかがえます。

【その後、加賀屋への取り調べ】
それから日も浅い同年九月一日、幕府勘定奉行配下の組織であり、抜け荷関係者の探索をおこなっていた関東取締出役の者から、小千谷役場の役人あてに依頼書が届きます。

(略)……唐物薬種の密売をした新潟湊の美濃屋長之助を召し捕らえて吟味した所、妻有十日町の薬種渡世の加賀屋清助へ、薬種類の取り次ぎをしていたと申しました。これにつき、清助を吟味するため、二厄介ではありますが、早々に召し捕らえて、長岡の御用先へお引き渡しくださるよう、お頼み上げます。……(略)

ついに加賀屋に関東取締出役の手が伸びてきました。清助は当時、加賀屋本店から薬店の差配を任されていた人物です。しかしながら清助は事件が発覚する以前、この年の六月二十二日に病死していました。

このため加賀屋では、関東取締出役の問い糺しに対して、本店へ事件の影響が及ばないように「委細は清助が死失しているために分かりがたい」として事態の収束を図りました。

遠く十日町まで波及した、新潟唐物抜け荷事件の一断面です。

(あたか しゅんすけ 学芸員)

昔の物価

数年前、私が歴史を勉強しているという程度にはわかっていて、昔の物価が、電話で次のような相談を持ちかけてきたことがありました。

曰く、祖父が、明治28(1895)年に50円を借りていた。今それをお返しするとしたら如何ほどか、君だったらわかるだろ、という。むろん無利息の勘定です。

日本史の学習では、お米の値段に換算することが多いのですが、この物差しは「本当？」と疑問に出会うこのごろです。そのため大工さんの手間賃がよいか、公務員の初任給がよいか、あれこれ迷い結局、「お答えは不能」で勘弁してもらったことがありました。

そのために私の気持は落ち着きません。便利な某新聞社刊『値段の明治・大正・昭和風俗史』の表には食糧提供とありましたが、東京で白米10kgが明治30年に1円12銭、昭和52年に3千円とあり、今日、高級なお米は別にして今日の相場にはよらず、スーパー店頭を見ますとそんなところす。そこで50÷1.12×3000は、約134,000円です。

一方円は、明治2年メキシコドルと等価の1円銀貨に始まり、明治4年の金本位制で1円金1.5gとして、明治17年の銀本位を経て、明治30年の金本位制で1円が金0.75gとされ、1917年に兌換廃止まで続きます。

されば50円の返済で無利息とあるついでに、明治30年1円金0.75gを基準に赦してもらうと、本年6月17日の金1gの相場が4,245円。50円は、金37.5g×4,245円=約160,000円となります。

なお最近改めて頁をめくると、ハガキの値段、「明治32年、1銭5厘」とあり、ああこの1銭5厘。成人男子を兵隊に召集した令状の料金として有名でしたし、情報社会の今でも50円で頑張っている日本のハガキは、おじいさんが借りた額も同じ50円ですからおおよそ3300倍。うん！ 165,000円。

明治30年頃より百十余年の歳月を経て、当時の50円は、金で37.5g、今の価格でおおよそ16万円ほどであったが、今やはがき1枚の値段である、ということに考えが及んだとき、祖父母の歩んだ暮らしの歴史として肝に銘じておきたいと思った次第でした。

収蔵資料紹介

新潟市大火災後渡船場の繁雑及焼残の万代橋を見る

この写真は個人の方が当館に寄贈されたコレクションに含まれていたものです。

写真の標題や奥に写っている初代萬代橋と思われる残骸から明治四十一(一九〇八)年三月八日の新潟大火の後に撮影されたものであることがわかります。

新潟歴史双書『萬代橋と新潟』の三五頁にこの写真が掲載されています。それによると、同年三月九日に萬代橋の代わりに信濃川で渡船が運行され始め、六月三十日の萬代橋の仮橋開通まで続いたといえます。他にも渡船は県営で無料であったことや大変混雑したこと、和船から汽船へ輸送方法が変わったことなどが書かれています。

ただこの写真が撮影された場所や時期は書かれていません。これを推測することはできないでしょうか。

明治四十一年六月三十日の『新潟新聞』に「雑報 萬代橋渡船式」という記事があります。六月三十日の萬代橋仮橋が開通した際に新潟県の土木課長が報告した内容を引用したもので、この中に渡船場についての詳しい記述があります。「第一 渡船」という節に次のような記述があります。

「……(前略)……九日午前九時より直に渡船に着手し……当市越佐汽船会社前より沼垂萬代橋詰間の旅客及郵便

物の往復に供し次で十一日より佐越(「越佐」か、田嶋註)汽船会社前と沼垂字流作場間の渡船は蒸汽曳船一艘と客船六艘を以てし其後三月十三日新潟市側渡船発着点を魁町税関脇巡查派出所構内に移転し現今に至り……(後略)……」

この記述によれば、新潟側の渡船場は越佐汽船会社前(下大川前通五ノ町)→魁町税関脇へと、沼垂側は萬代橋詰↓字流作場へと移動したことがわかります。つまり渡船場はいずれも萬代橋の下流側であったわけであり、写真の撮影位置は信濃川との関係から沼垂側の渡船場であったと考えられます。また、汽船が利用されていることや、撮影位置が萬代橋詰でなく字流作場らしいことから、三月十一日以降の撮影ではないかと思われま

す。以上のことから沼垂側から大火数日後にもかかわらず大勢の人が信濃川を渡っている様子を撮影した写真ということができます。渡船の利用状況としては一日平均五千四百十人、述べ六十五万人が利用したとのことす。この写真も萬代橋が失われた影響の大きさを伝えるものといえるでしょう。

(田嶋 悠佑 学芸員)



(新潟市歴史博物館所蔵)